



ナナフシのはなし

ナナフシを助けたことがある。多分、梅雨の頃だった。

その日は三歳の息子を連れていた。雨上がりで、私は片手に傘と買い物袋を持ち、もう一方の手で息子の手を引いていた。コンクリートの地面はよく湿っていて、空気はけだるくぶよぶよしていた。

もうすぐ家というところで、道の真ん中にナナフシが居るのを発見した。このあたりで見つけるのは珍しい。しかし、息子とよく見てみるとナナフシは弱っているようで、じっとしているのである。このままだと、ナナフシ轢かれるんじゃない？ この道は交通量が多いわけではないが定期的に車は通る。まあ、時間の問題だ。

おおきい虫は怖い（お好きな方、ごめんなさい）。しかし、このまま見殺しにするのは情操教育上も、寝覚め上も非常によくはない。私は逡巡したが、覚悟を決めた。そして、持っていた傘の先をナナフシに差し出したのである。ここにお乗り。

するとナナフシはそろそろと傘の先に乗った。乗ったはいいが、怖い。私は相当ビビりながら、道の向こうに歩いた。対岸にはちようどよいことに風致林があるのだ。多分あそこから来たのだろうし、返してやればいいだろう。私が歩く間ナナフシは、傘の上でもぞもぞしていた。なんとか草地に辿り着いた私は傘を振って、ナナフシを落とした。草の上とはいえないさかさか乱暴であつたと思う。

助けられたね。うん。帰ろうか。かえろうね。私と息子は家に帰った。

さて、翌朝である。家の外に出るとなんと郵便受けの上にナナフシがいるのである。私はびやっとなった。お、お礼言いに来たの？ などと馬鹿なことが頭をよぎった。まさかそんな筈はない。しかし今まで一度もこんなことはなかったのに、ナナフシを助けた翌日にナナフシが郵便受けに乗っていると

いうのは驚くべきことじゃないだろうか。というか本当にお礼なら、顔を見せてくれない方がいいのだけれど。びっくりするし怖いから……。

あれからもう数年が経つ。結局、家の前にナナフシが居たのは、あのナナフシを助けた翌日だけである。

（埼玉 島本ちひろ）

朝の散歩

毎晩酔っぱらって、夕食が終わるや否や寝入ってしまうおかげで、朝五時前後には健康的な目覚めを迎え、情操涵養と健康増進とを目的に散歩に出ます。山裾にある家から川沿いに海に向かって下り、相生湾最深部に位置する那波港口に架かる相生大橋を渡り、那波の旧市街を抜けて帰ってくる六キロ余りの道のりです。

家を出て普光沢川ふこうさかに沿う道を下ります。川はほぼ全域をコンクリートで覆われていますが、川床から巨大な岩がせり上がっている場所があつて、時には翡翠が止まって首を傾げていたりすることもあります。

ほどなく鮎あゆ川が合流します。コンクリートの法面の間にできた洲を分

けて細い流れが入る所に瀬も出来ていて鷺が立ち、自然の川らしい風情も少しは感じられます。さらに下ると川は茅谷川に合流しますが、そこから海まで一キロ弱はまるでコンクリートのプールのようで、春の明るい日差しには、底まで限なく煌めき、クラゲや大きな鱈や鮭、茅渟がひしめき、鵜が水中を飛ぶように魚を追う様子もありありと目に入ります。

幽霊山の裾のお地藏様を過ぎ、川沿いの部落、遊郭跡を通り過ぎ、マリナー、鉄工所の裏を通る小道を抜けて、相生大橋を渡り、昔は岬でしたが、今は公園になっている丘に出ます。図書館や資料館のある西側には行かず、切通しを抜けて小さな干潟に出ます。干潟には木々に覆われた丘が迫っていて、その裾に張り付くように細い散歩道が通っています。対岸にはさつき歩いてきた茅谷川の河口と那波港の東岸を形作る大島山が見え、港はまだ丘の曲線に隠れて見えません。大島山の岩礁には鷺が立ち、海鷗がゆるゆると羽を振って乾かしています。鰯が点々とはねる音が響きます。

歩いて行くにつれて、冬であれば鴨の群れが水脈をひいて潟を離れ、鷺が

対岸や或いは遙か川の上流に向かって飛んで行く鳴声が耳に残っている内に港を隔てて、那波の旧市街が見えてきます。堤防に沿ってまっすぐ進めば那波八幡神社の鳥居ですが、一本東の小道から那波の旧市街に入ります。今は雑草の茂るに任せた新炭間屋田原桐太郎商店跡の桜の大木が影を作っています。

道は家々の間を縫う細い路地りまで舗装されてしまっていますが、フェンスを被せられた大きな石組みの井戸や、木格子のある家々、お屋敷の玄関前の湿って苔むした土など昔の面影は残っていて、ほら、ちょうど今、向こうの路地の角を幼いころ良く見かけたおじさんが曲がって行ったような気がするのです。(兵庫 大西恒祐)

母の妹、通江ちゃん

私が中学生になった頃からだっただろうか。学校から帰ってお菓子をつまんでいる時など、母はときどき思い出したように自分の妹、通江ちゃんの話を始めはため息をつくようになった。きつと母の心の中にはいつも亡くなった妹がいたのだろう。昭和七年生まれ

だった妹を母はいつも「通江ちゃん」と呼んでいた。

昭和二十年四月、二人の姉が通った広島市内の女学校に入学した通江ちゃん、姉たちが女学生だった頃と同じように、勉強したり友だちとおしゃべりしたりする学校生活を夢みていたに違いない。

しかし、その頃は戦況がいよいよ厳しさを増し、十二歳の通江ちゃんのおさやかな夢が叶うような状況ではとてもなかったのである。生徒たちは土曜、日曜もなく、戸外で建物疎開の作業に従事させられていたという。そんな毎日を送る妹を見かねた母がそっと「たまには休んだらどう？」と言ったところ、いつもはおとなしい通江ちゃんが「そんなことしちゃあいけんよ」と強く反発したという。お国のために尽くすのは当然のことだと固く信じていたのだろう。

入学してわずか四か月後の八月六日午前八時十五分、広島市上空に原子爆弾が投下された。

爆心地周辺の地表の温度は約三千、四千度にも達したという。鉄の溶ける温度が約千五百度と聞けば、想像もできない熱さだったことが知られる。爆

心地から約一、二キロ以内で被爆した人々は皮膚が焼き尽くされ、ほとんどの人が亡くなったという。通江ちゃんが作業していた雑魚場町は爆心地の大手町から約一、一キロの距離だったそうだから、両親や親戚の人たちがどんなに探しても見つからなかったのもしかたのないことだったのだろう。通江ちゃんは遂に両親の墓に入ることはできなかつたが、同じように亡くなった大勢の友人たちと共にやすらかに眠っていることと思う。

おかつば頭の少女だった通江ちゃんの笑顔を古い小さな写真で見ることがある。妹の悲惨な死を思い出しては口にする母の繰り返いに、もつと耳を傾ければよかつたと亡き母に心から詫びたい。

広島市平和記念公園の原爆死没者慰霊碑には「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」という碑文が刻まれている。

今まさに戦争のさなかにいる国々の指導者たちにこそ届いてほしいことばと思う。
(広島 木戸 博恵)

食の有り様

魚屋の店先に黒光りする朝採りイカが並んだ。梅雨イカという。梅雨の時のイカは旬、柔らかくて美味い。これを細かく切り、イカソーメンにして醬油をサツとかけ、熱々の飯にぶっかけてかき込む。たまらない。このイカを奈良に住む息子に直送したいと思い、息子の嫁さんに「イカ料れるか」と電話で聞くとダメだと言う。さもあらんとあきらめたが、これが現実なのである。

スーパーには外国産の冷凍魚が解凍され、きれいに切り分けられ、パックで並んでいるから料理の間はかからない。キッチンも汚れずゴミも出ない。用途に応じ使い分けた出刃包丁、刺身包丁なども家庭から消えた。

魚屋さんが魚を魚として売れなくなつたと言う。海から来たままの一本物の魚が売れないのだ。仕方なくパックの刺身や一夜干し、握り寿司、塩辛等の加工品にして売上を繋いでいる。その魚屋さんも行き詰まり、目利き自慢の街の魚屋さんなど、私の街には一軒もなくなつた。生活の効率化、合理化

が街の味わいを消し去ってしまったのだ。八百屋、酒屋、本屋、洗濯屋みながら、商いが廃れ、街が壊れ、ふる里が消える。便利さを求め、行き届いた手間が切り捨てられてゆく。

私の住む能生の漁港は新潟県で一番の漁獲量を誇り、鯛やハタハタなど豊富に水揚げされるが、ほとんど地元には出回らない。田舎の消費量は乏しく売上に足りないから、金になる都会へ直送されるのである。私たちは外国産の安いマグロを食べている訳で、新鮮な地元魚にあり付けないという変な事が常態化している。流通が食の有り様を壊してしまつたらしい。

ある会で隣り合った信州の人から「糸魚川の人はホントに不味いリングオを食べているよね」と言われた。流通が良くなり、農家直送リングオなるものを食べていたが、確かに信州の農園で食べるリングオの味は何か違う。作物が育つた土の匂いを嗅ぎ、生のままで戴くという食の原点に気づかされた。

私は昨年から、カニを売る店が集まる道の駅に勤めている。日本海のカニを獲る漁師が、カニ屋横丁で茹でて直売するカニが新鮮で安く、年間百万人が訪れる。ここに来る人はカニを

買うだけでなく、日本海を見ながら潮風を感じ、獲れたてのカニを食べるという目的を持つ。

今は能登半島地震の海で生き抜いたカニが売場に並んでいる。カニが棲む能登沖の海にも海底崩落があった。風景や風土の中に食を育んだいろいろな物語がある。そんな付加価値をも味わう事が産地で食べるということだ。産地の食を存分に楽しむことができた。素晴らしい。(新潟 黒石 孝)

〈夏〉観戦記

七月二十二日午前十時。気温はすでに二十五度を越え、陽射しが痛い。その日私は「はるか夢球場」のスタンドにいた。青森県高校野球夏の大会を観戦するためである。長く勤めた弘前学院聖愛高校と、青森山田高校との決勝戦。今年、聖愛は山田に負け無しで、ぐんと甲子園が近づいていたのだが、それが逆に恐くもあつた。

退職して三年、学校もだいぶ遠い存在になったが、もし甲子園出場がかなうなら、その歓喜を同じ空間で味わいたいと思つた。クローゼットには今も、校名入りの黄のTシャツ、帽子、タオル

ルをしまつてある。甲子園初出場の記念に作られたものだが、あれから十一年が経つのだと思うと、時の流れから放り出されたような心地がする。過去は過去。私は応援グッズを元に戻し、白のTシャツにジーンズという格好でさらりと出かけることにした。

試合当日。混雑を想定して早めに出かけたが、運良く球場近くに車を停めることができた。幸先よし。すでに聖愛の全校生徒は内野スタンドに陣取り、多彩な応援を繰り広げている(スポーツの応援に大声で讚美歌を歌う学校はそうそう無い)。その隣のブロックには揃いの岩木山Tシャツを着た保護者会の面々。そこに行けばかつての同僚や保護者、幾人かの在校生や卒業生が声をかけてくれるだろう。しかし退職ののち「現在」を共有しない者同士のぎこちなさをたびたび感じてきた私は、少し離れた所に席をとつた。

そしていよいよ試合開始。スタメンには、中学一年からその成長を見てきた数名が含まれている。先攻の聖愛は初回、二回と効率的に得点をあげて二対〇。その後たびかさなるピンチに見まわれるも、何とか切り抜けて迎えた五回、たった一球の甘い球が満塁ホー

ムランとなって二対四と逆転を許す。そして九回表、聖愛最後の攻撃。応援団が祈るように「We shall over come (勝利をのぞみ)」を歌い、選手らは何とか二点差を覆そうと粘り強さを見せる。遂に同点のランナーが出塁したところで、待望のタイムリーヒット。一人帰り二人帰り同点!と思いきや、打球がバウンドしてスタンドの中に入つたため二塁打の扱いとなり、追加点は一点に留まつた。反撃もこま

で。あと一点が遠かつた。ゲームセットの長いサイレンが響き、高校三年生の〈夏〉が終わつた。

私は渋滞を避け、いちはやく球場を後にしたのだが、途中で選手を讚えるエールが聞こえてきた。私は小さく声を合わせつつ、来年は黄のTシャツを着ようと心に決めていた。

(青森 福士 りか)

